

道より西諸田の岸に添き東漸寺の柵に忍び臥る折しも
中岡弘前守り年の若き是を見付け救更て大勢通る
何者そと然るも源範進出て是は荒瀬山虚空藏
別当何某と山伏に曰く四圍の所は汝の糧米を送り
持て通りかゝる審と思召さ人を介て書内を預けり
云ふれは是を見て雲山伏をちやふむなり然れども見届け
此為めそ是様二人附随せり途中に源範忠夜見合
彼の二人を切伏せり是より若むやかに使を命て岡井隆茂の
方へ右の趣をいれ隆茂大司の事ありとそ一族を集め評
議せり隆茂之男隆信進に出かけける様の時老なる近も

あし重きより東漸寺右馬頭と惣切涼く義光公にも思顧
せ我々これ一分を立旅を揚ぐし刻へ東海林兄弟の義勇
と多くに頼まれり予然ふ所の事ありといささか此の隆茂
を始め一門は同じく別源範を招き源範大に悦び謀の
評議及びありかくて夜討に合はし以上評議及も明に
は其用言はしとて柵の表に番士を置き軍議ありあり隆
茂中より兎角は色ども味方の者も救多有るも此も中遠に
かりて計らひかし東海林度中越し有て義光公の御召ありと
披露し玉たり然れども日午の刻に源範又忍び出きて飯
登山歸りしに中岡弘前守りの者昨夜二人の是輕途